(C)東奥日報社

風雪の英語人 佐々木多門

是清の右腕として活躍した県人

佐々木紀人 ⑧

顧問料支払い

金にこだわらない床次

読者のみなさんは、佐々木多門が、高橋是清と床次竹二郎からもらっていたという顧問料について興味はないだろうか。

まず、予備知識として当時の貨幣価値を確認しよう。『「月給百円」サラリーマン 戦前日本の「平和」な生活』（岩瀬彰）によると、昭和初期と現在の貨幣価値では、物価ベースで2千倍、給与ベースで5千倍の開きがあるそうだ。よって、これはあくまでも目安の話だが、給与で換算する場合は、それを5千倍すればだいたいの見当がつくわけだ。

大正時代、是清は多門に対して年2回、盆暮れに500円（現在の約250万円）ずつの顧問料をわたしていたという。多門の日銀退職時の月給が300円（同150万円）だったので、年額千円（同500万円）の顧問料は、それなりの額といえる。さらに是清は、多門が日銀を退職すると、在職時の年収と同額の顧問料を支払うことを提案したというが、これは多門が固辞したそうだ。

■……◆……■

では、床次はどうか。「私は全く金は持ちません」と本人は演説で語ったが、床次は、多門に十分な謝礼を払う余裕がなかったそうだ。そのかわり、外国たばこや洋菓子など、自分がもらってきた物を頻繁に届けたという。

大々的私鐵買收に
高橋藏相反對す
出しても精々一千萬圓位――と
床次鐵相に答ふ

同じ内閣の閣僚ながらもめる是清、床次の様子を伝える当時の新聞。出典は時事新報（1932年５月４日）、神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫所蔵

ただし、床次は決してケチな男ではなく、多門に言わせれば「金に執着しない男」なのだ。実際、金がある時には、目が飛び出るほどの大金をわたそうとしたこともあった。

高橋内閣の時、多門にとって困ったことが起きた。大学設立に関する予算の問題で、是清と床次に確執が生じたのだ。それ以来、多門はそりの合わなくなった両者の関係を調整するのに苦労した。

多門は、是清の方針を支持することが多かったため、床次は次第に多門の言葉に耳を貸さなくなっていったという。そうこうしているうちに床次の歯車は狂ってしまい、相次ぐ離党を繰り返して、世間の批判を浴びるようになった。

■……◆……■

多門は、こうした床次の定まらない姿勢に「だから金魚の刺し身と言われるんだ」と憤慨した。「金魚の刺し身」とは、「見た目はいいが食えない」という意味。離合集散を繰り返す床次を、当時の一部マスコミがこう揶揄（やゆ）していた。

親友である多門も、床次には何度も愛想を尽かしそうになった。ところがそうすると、人柄のいい床次は「申し訳ない、佐々木くん。やっぱり君の言う通りだった」と素直に謝罪するそうなのだ。知己にこう言われては、断れるはずがない。結局、多門はまた力を貸す羽目になるのだ。

人の意見に左右されることが多かった床次竹二郎。床次は、常に総理大臣候補に名が挙がったし、多くの国民も、そして本人も、いずれはそうなると信じていた。だが、その夢は、ついにはかなわなかった。

もし仮に、床次が多門の言うことを聞いていれば…。私はそう考えてしまうのだ。

（蟹田中教諭、佐々木多門研究家）